



2019年1月 第10巻第1号

中部自由美術協会のあゆみ 2018～2019

- ◇ 2018年度 平和賞受賞の言葉
初入选から半世紀を経て 平面部・森谷 連
- ◇ 「私の絵画制作」の思い
(牛と共に生きる)の歩み 平面部・川村晃夫
- ◇ 30有余歳にして立つ 平面部・竹中稔量
- ◇ 制作を続けてきて思うこと 立体部・竹本鉄夫
- ◇ 自由美術中部巡回展を巡って 自由美術協会事務局長・田中秀樹

▼2018年度 受賞者の言葉

初入選から半世紀を経て

森谷 連

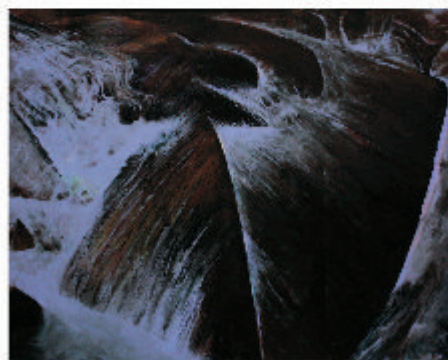
初入選は、1967年第31回自由美術展“今日の証言”である。岐阜県小中学校教員として赴任した標高1,240m 乗鞍岳と御嶽山の間で長野県境に位置する日和田小中学校からの出品であった。公共交通機関もないへき地からの出品には困難を要し、初入選通知の報には感慨深いものがあった。

岐阜市へ転勤になった'74自由美術展“ユマニテ”出品の「歪む」「拒む」(F60)の2点入選で会員に推荐された。翌年の中部自由美術展では私を含めて3人の特別陳列が企画された。当時の中日新聞の展覧会評には『森谷は「難民」「憂囚」「充たされぬ計画」といった政治問題で動乱状態にある国と国民を扱った画面だ。問題が大きすぎるのか、作者のヒューマニズムに、その問題のどの点が深く突き刺さっているのかがはっきりしない』(原文のまま)テーマばかりが先走りする観念的な生意気な作品だったように思う。

2000年以降、自身の作風に変化が生じたように思う。変化の起因は“自然災害の連鎖”による故郷の自然破壊にある。1986年我が故郷飛騨市は未曾有の水害に見舞われた。2002年再び飛騨市は決定的な豪雨災害に見舞われた。“百年に1度規模の災害”が、たった15年間に2度も生じたのである。2002年第66回展出品の「記憶の溪I」(F100)は、それまでの作風の転機となった。

縄文人遺跡も点在し、古来より豊かな自然に恵まれた地形が、溪谷や河川の氾濫、崩壊により失っていった。以来望郷の念とともに自然の猛威に対する畏敬の念を強く抱きつつも、今年の“自然災害の連鎖”に代表されるように、地球上の人間の驕りが地球温暖化をはじめとする諸現象を生んでいるように思われてならない。

最後に、今回の“平和賞”受賞は私にとってこの上ない栄誉で望外の喜びである。今回の作品は画面中央の半円状の形が最初に決まったが、構図が平板でしっくりこなく出品間際まで描き直しては消しの繰り返しであった。最後に画面右側の岩を大きく傾けたことで動きが出た。



「私の絵画制作」の思い

〈牛と共に生きる〉の歩み

川村晃夫

1945年(昭和20年4月5日)20歳です。私は「師範現役」として大竹海兵団に懲兵入団。呉海兵団、3ヵ月めに航空戦艦「日向」に2連双高角砲の高射砲員として乗艦しました。

伝声管による北緯・南緯・高度等のマスト情報を目前の計器に即時セット。自動的に高角砲を敵機に射撃させることが任務です。

目前には、木刀を構えた上官が睨目。

ハンモックに横たわると両親のことが、そして何時も自宅裏の田で耕耘する牛の勇姿が浮かびます。

手綱締めを体感した牛は喜怒哀楽を私達のように流涙の眼として光らせています。

○ ○

1945年(昭和20年8月15日)終戦。— 復員。同年(10月15日)戸田



国民学校訓導(昭和22年より戸田小学校)。1948年(昭和23年4月)富田中学校の生徒らのつづらで輝く無数の眼が“ハンモックで回想”のいとおいしい赤牛の眼と時には流涙の珠玉のような眼として折り重なり、何時か生徒らの眼を心とする赤牛に幾つもの思慮や事象を託して半具象作画。1961(昭和36年)からは「牛と共に生きる」の連作に入りました。

現在は時事“飛翔シリーズ”で天狗像・山の神像・カッパを配して作画です。自由美術展(東京 国立新美術館)

○81回展“用心の心、流すな川あそび”

○82回展“山用心、イエロー。レッドが命を守る”

富田中学校有志会様(1952年昭和27卒業)のご来展と記念写真の収録集は励みの源です。

「私の絵画制作」—今キャンバスを前に①資料の蒐集・選択②構想の焦点化に傾注して③ドラマの構築④リズムの競演、に強い思いを込めていきます。

“赤牛が今後の人生に「生きる強さ」と「思いやりの表情心」をどう手向けるか。”をどう描出するか。

こうして「作画の今」が得られるのは中部自由美術協会の絆の賜です。会員相互の人間性と即作品が交流し合えることは何より宝であり貴重な示唆です。

全日本美術新聞社様発行(2018年12月)の「明日への飛翔・現代日本の作家」に登載のご高配に厚く感謝申し上げます。

30 有余歳にして立つ

竹中稔量

2016 年自由美術機関紙第 80 回記念号に掲載した「私はこうして自由美術にたどりついた」と題した文章がある。絵画制作には、種々の約束ごとがある。「絵画とは何か？」への追及及び専念することを放棄して身から湧き出る物を自由気ままに形と色彩で平面に描きつらねる、そんなやり方で作品を作っていく、そんな描写の仕方にひかれ、夢を見、思考し、湧き出る思想、ことばを作品にぶつけて来た。世の中の出来事や思想が私自身の形となって表現をしている。我が作品は、自分自身の分身であり魂の具現である。一人ひとりの個性と生きざまである。何を表現しようとしているのかがその人の勝手であり気ままな形や色である。どれをとっても同じでない、作家の生きざまが現れていることをもの語っている。そんな中、作者の技法を学ぶ、しかし、作家の技法は盗むが、作風は盗まない、それはオノレ自身のものであり夫々の体内から湧きあがるもので、自分自身しか持ち合わせていないはずだ。個人の思想であり哲学でもあるからだ、このようにして世の中の事件、路傍で目にした情景が形になって表れてくる画面には色と形しかない、しかし、それは、絵画を平面として考えた場合であり単純化して定義付けたこと

にたどりつく結論であり実際には何をどのように描写しようと作家の自由であるべきだ。そのような考えの基に私は、絵画とは何かと考え続けて 10 代、20 代を悩み続けて 15 年あまりを過ごしようやくその悩みから解放された。小躍りするような気持で画面に向き合う自分を発見したのである。以来 50 年、今、ようやく 80 歳をこえて自分のやってきたことに全く悔いはない。

思いつくままにこれからも自分の思想、哲学を形と色で表現する喜びを楽しみながら自由自在に描き続けたいと考えている。



制作を続けてきて思うこと

立体部会員 竹本 鉄夫

私が木彫を始めたのは、21 歳の頃です。大学の彫刻教室で、たたきのみを 2 本（平と丸）購入し、大学の先生の指導のもと、木を彫り始めました。たたきのみは木槌を使って木を彫り進める道具です。たたく時の力の入れ方が分からず、力任せに冠（かん

むり）をたたくので柄が割れたり、刃こぼれしたりと道具の手入れで随分と時間を費やしました。おまけにチェーンソーや電動工具を使うのも初めてなので、削り過ぎ、やり直しや失敗ばかりで、作業効率はひどく悪かったように思います。ようやく道具に慣れてきた頃には、もう大学を卒業です。

そこで困ったのが制作環境をどう整えていくかです。大学を卒業してから彫刻の制作を続けていくには、材料や道具、工作台、作業可能な広さの部屋の確保、そして、いろいろな工具から出る騒音が周囲に迷惑をかけないような環境が整っていないとできないのです。幸いなことに自宅は（現在の長久手の自宅も田舎ですが）田舎にあり、天井は低いものの、作業場としてコンクリートブロック造りの車庫（車は外に）が使えました。

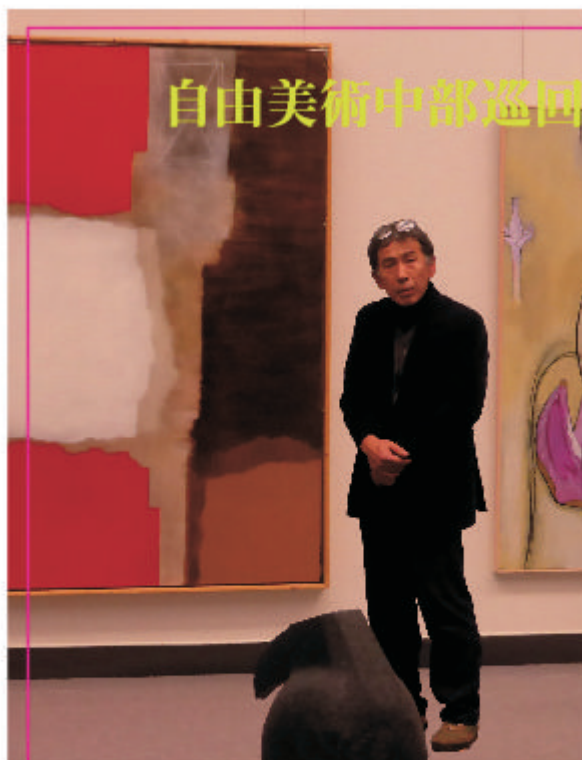
材料はあちこちの材木屋や製材所から調達が可能でした。木材は丸太買いで、その場で製材して大まかに角材と板材に製材してもらい 3～4 年乾燥してから使います。この期間にひび割れたり、大きく歪んだりする材も多く、使う直前にもう 1 回材料を整えます。一番困ったのは、サクラ材を使っていた時です。乾燥するとひび割れがひどく、ねじれや歪みもひどく随分と困りました。そして、もっと厄介なのは、サクラ材は木の内部にテッポウムシ（材木屋が命名？）という幼虫が棲みついていることが多く、テッポウムシが食べた箇所は木が発泡スチロールのようにボロボロになってしまいます。ある時、美術館で作品の展示中に照明やエアコンの熱のせいで材料の温度が上がったことが原因となり、材料の中のテッポウムシの活動が活発になり材料を食べ始め、作品の外部に木くずが落ち始めたこともありました。この時は、美術館の学芸員に見つかり、当然ながら厳重注意を受けました。これ以後、私はシロアリ用の殺虫剤を、事前に木材の虫食いの穴に注入することにしました。

道具や工具は 10 年間ほどかけて揃えました。電動工具は結構長持ちするもので、40 年前に購入した日立の電気カンナと木工用の電気ドリルは今でもばりばりの現役で使っています。私が今も制作を続けていられるのは、このような制作に適した環境に恵まれていたからだと感謝しています。



自由美術中部巡回展を巡って

田中秀樹



1月12日(土)、自由美術中部巡回展(愛知県美術館ギャラリー)の研究会に参加させていただいた。

会場に入ると落ち着いた感じの心地よい空間が広がっていた。一つの部屋に平面作品と立体作品が共に展示されており、実に良い雰囲気を作り出している。私は個人的に平面と立体が共存する形での展示が好みなので、すぐに馴染むことができ感動的でさえあった。展示も作品量がちょうどよい感じで、絵と絵の感覚も程よく大変見やすかった。

愛知県美術館ギャラリーは改装後間もないということで、きれいでさわやかな空気が感じられた。以前はなかった工夫も多くなされているようで、特に照明はいくつかの部屋に立体専用のものが設置され、立体の会員から大変喜ばれたという。拝見すれば、なるほど個々の作品に具合よく照明が当てられて、それぞれがしっかりと存在感を示していた。会場全体の照明も

光がやや抑えられていて、しっとりとした優しい明るさであった。

研究会の進行は、参加した会員・出品者全員が自作を語り、そこに向けて感想や質問を述べ合うという内容で進められた。それを参加者全員で行うのであるから、おのずと中身の濃いものとなる。参加者全員といった機会は最近めっきり少なくなったが、作家本人とのやり取りをしながらの進行は、それぞれの世界が分かりやすく、また制作に向かう姿勢も伝わってくるので大賛成である。作家自身が制作に向かう過程での疑問点や迷いなども多く出された。それに対して参加者がそれぞれの立場(世界)で考えを述べ合う場面は、ご本人はもとより我々全員にとって大いに参考となるところである。人によって受け取り方や感じる場所は異なるであろうが、そこが重要であり面白いところでもある。

時間を忘れるほどの熱いやり取りが展開されて、大変充実した楽しい時を過ごすことができた。ありがとうございました。

展覧会の記録／2018.05 ～ 2019.05

- 第69回 中部自由美術展 2018 5/1～5/6 名古屋市民ギャラリー栄 6・7
- 野村和弘彫刻展 2018 11/14～11/19 画廊じんがら(知立市)
- 第5回 中部自由美術版画グループ展 2018 12/4～12/9 愛知県芸術文化センター アートスペースH
- 第82回 自由美術展(巡回展 名古屋) 2019 1/8～1/14 愛知県美術館ギャラリー G・H・I

2019年 中部自由美術展 会場風景



